

# 挂甲の武人 国宝指定50周年記念 特別展「はにわ」

埴輪とは、王の墓である古墳に立て並べられた素焼きの造形です。その始まりは、今から1750年ほど前にさかのぼります。古墳時代の350年間、時代や地域ごとに個性豊かな埴輪が作られ、王をとりまく人々や当時の生活の様子を今に伝えていきます。なかでも、国宝「埴輪 挂甲の武人」は最高傑作といえる作品です。この埴輪が国宝に指定されてから50周年を迎えることを記念し、全国各地から約120件の選りすぐりの至宝が空前の規模で集結します。素朴で“ユルい”人物や愛らしい動物から、精巧な武具や家にいたるまで、埴輪の魅力が満載の展覧会です。東京国立博物館では約半世紀ぶりに開催される埴輪展にどうぞご期待ください。



**国宝**

**埴輪 挂甲の武人**

群馬県太田市飯塚町出土  
古墳時代・6世紀  
東京国立博物館蔵

**重要文化財**

**埴輪 挂甲の武人 (部分)**

群馬県太田市成塚町出土  
古墳時代・6世紀  
群馬・(公財)相川考古館蔵

**埴輪 挂甲の武人**

群馬県太田市出土  
古墳時代・6世紀  
アメリカ・シアトル美術館蔵

**埴輪 挂甲の武人**

群馬県伊勢崎市安塚町出土  
古墳時代・6世紀  
千葉・国立歴史民俗博物館蔵

**重要文化財**

**埴輪 挂甲の武人**

群馬県太田市世良田町出土  
古墳時代・6世紀  
奈良・天理大学附属天理参考館蔵

2メートルを超える巨大円筒埴輪に、愛らしい動物埴輪。東京国立博物館（台東区）の特別展「はにわ」では、東北から九州まで各地の古墳で出土した3～6世紀の埴輪など約130件を展示する。

注目されるのは、鉄製の甲冑姿の武人を模した「挂甲の武人」。同館所蔵の国宝の埴輪に加え、同じ工房で制作されたと考えられる多館所蔵の4体も加え、計5体が一堂にそろった初めての機会となる。5体はいずれも6世紀に作られ、群馬県で出土した。当時、王権の中心地だった近畿地方（注・？）では埴輪生産が衰退したが、東日本の埴輪生産は続いていた。同館の河野正訓主任研究員は「近畿の埴輪の影響が及ばない関東で、独自の埴輪文化が発達した」と説明する。関東で馬の飼育が盛んとなった時期と重なり、馬を乗りこなした武人がモデルとなった可能性もある。「挂甲の武人」と並ぶ目玉が、埼玉県古墳で出土した同館所蔵の2体の「踊る人々」。ひび割れなど劣化が目立っていたが、今年3月に修理が完了した。この埴輪を巡っては、近年、新たな説が注目されている。独特の手の動きは踊りを意味するのではなく、片手を上げて馬をひいている姿ではないかという説だ。1体の腰には鎌がさげられており、馬の飼い葉を刈るために用いられた道具とする説も出ている。同展ではほかにも、王の魂を運ぶ船形埴輪や、夜明けを告げる鶏形埴輪など、近年の研究に基づいた埴輪の意味や役割を紹介している。河野主任研究員は「多彩な埴輪の魅力を通じ、古墳時代の最先端の研究を知ってもらえたら」と話す。（注・？は事務局）

### 埴輪 踊る人々

埼玉県熊谷市 野原古墳出土 古墳時代・6世紀  
東京国立博物館蔵

埴輪といえばこれ！と思われる方も多いですが、実は時代が新しく、表現の省略が進んだ姿です。その反面、埴輪がもつ独特な「ゆるさ」を象徴する存在でもあります。王のマツリに際して踊る姿であるとする説のほかに、近年は片手を挙げて馬の手綱（たづな）を曳（ひ）く姿であるとする説も有力です。



### 重要文化財円筒埴輪

奈良県桜井市 メスリ山古墳出土 古墳時代・4世紀  
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵  
日本最大の埴輪。メスリ山古墳では、後円部中央の縦穴式石室を取り囲むように多数の巨大な円筒埴輪がたてられました。この円筒埴輪はそのうち最大のもので、2メートルを上回るその高さ、大きさもさることながら、2センチメートルほどしかない薄さにも注目です。

### 家形埴輪

大阪府高槻市 今城塚古墳出土 古墳時代・6世紀  
大阪・高槻市立今城塚古代歴史館蔵

3つのパーツを組合せてつくられた巨大な家形埴輪で、屋根の上部と床下の高床部分が別づくりになっています。屋根の上には現代の神社建築にも通じる千木（ちぎ）と鯉木（かつおぎ）がのせられており、大王にふさわしい建物であることがわかります。



馬形埴輪



重要文化財  
埴輪 天冠をつけた男子



鹿形埴輪



挂甲の武人  
(彩色復元)